

## 共産主義者同盟の時期におけるマルクスおよびエンゲルスによる党把握の発展について

著者	HUNDT Martin, 橋本 直樹
雑誌名	経済学論集
巻	77
ページ	115-136
別言語のタイトル	Zur Entwicklung der Parteiauffassungen von Marx und Engels in der Zeit des Bundes der Kommunisten. In: Bund der Kommunisten 1836-1852, hrsg. v. Martin Hundt, Berlin 1988, S. 289-310
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/12043">http://hdl.handle.net/10232/12043</a>

## 【資料紹介】

# 共産主義者同盟の時期における マルクスおよびエンゲルスによる党把握の発展について

マルティン・フント著  
(橋本直樹 訳)

訳者はしがき

本稿は、Martin Hundt, Zur Entwicklung der Parteiauffassungen von Marx und Engels in der Zeit des Bundes der Kommunisten の試訳である。共産主義者同盟史にかんする旧東ドイツ (DDR) の主な論文を収めた *Bund der Kommunisten 1836-1852*, hrsg. v. Martin Hundt, Berlin 1988, S. 289-310 に収録されている。本稿は、本来、1980年6月12日にベルリンで開催された DDR のマルクス・エンゲルス学会第24回大会における報告原稿を改訂した論文であり、当初、*Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*(BzG), 23. Jahrgang 1981, H. 4, S. 512-527 に掲載された。

訳文中の // / 内の数字は底本のページ数であって、各ページの開始箇所にほぼ相当する文節等の位置に配してある。[ ] 内の数字は、本論文が BzG に収録された際のページ数である。参照文献等、原語を残すのが種々の点で便宜と思われる場合は、それを転記するに留めた。必要に応じて( )内に原語を示した。[ ] 内は訳者の補足である。

本論文は、第二段落後半をはじめ各所の叙述に隔世の感を禁じ得ないものがあるが、本テーマにかんして旧 DDR において最も高度で内容豊かな学術論文の一つであったとみてよい。それは本論文が上掲書に再収録されたことから窺えよう。例えば、いわゆる「マルクス党」、マルクスの仮借ない論戦の根拠、ベルンシュタインについての見方といった諸論点その他についての著者の説明には今なお傾聴に値する内容が含まれているように思われる。

無論、訳者は、著者とすべてにわたって見解を同じくするものではない。例えば、例示されている「レーニンの新しい型の党」の評価である。「19世紀末の革命的な社会民主党の型からレーニンの新しい型の党への移行」という著者も従っている当時の通説的理解よりはむしろ、『何をなすべきか』を素直に読むならば、レーニンが当時先進的であったドイツの社会民主党の組織形態に学んで、ロシア皇帝治下の官憲の弾圧の著しく強い後進的ロシアにどのように適用するかという懸命の努力の産物であったとみるのが穏当な理解なのではなからうか<sup>1)</sup>。また、「1860年2月29日付フライリヒラート宛のマルクスの手紙」に記される「大きな歴史的意味における党」の評価にかんして、著者の示唆する通り、「この手紙の成立事情」があるとはいえ、関連諸章句をそのまま字義通りに理解する読み方もないではないように思

われる<sup>2)</sup>。いずれにせよ、W. シュミットによる旧東欧諸国崩壊後の俯瞰的省察<sup>3)</sup> などがあるものの、そのテーマの多少特殊なために従来学術的関心があまり向けられていない可能性のあることをおそれ紹介した次第である。

なお、原著者については、マルティン・フント[拙訳]『『共産党宣言』はいかに成立したか』(八朔社、2002年)「訳者あとがき」の「著者について」の項目(221/222ページ)を参照されたい。

1) この点でのマルクスとの関係について、甚だ不十分なものであるが、拙稿「『1852年6月24日付マルクス宛ラサールの手紙』の一章句をめぐって」服部文男・大野節夫・大村泉編『マルクス主義の生成と発展』(梓出版社、1989年)46~61ページおよび同「雑誌の製本と原型の保持」『鹿児島大学図書館報』第38号、1991年7月、2~4ページを参照されたい。

2) 例えば、同じ旧DDRの研究者でもそのような読み方の一つと思われるのは、Karl-Heinz Leidigkeit, Marx, Engels und die Partei der Arbeiterklasse (1852-1860), *Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung*, H. 4, Halle (Saale) 1978, S. 48-49 [拙訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第20号(八朔社)1994年7月、72/73ページ]の箇所である。

3) Walter Schmidt, Über Entwicklung und Inhalt des Parteibegriffs von Marx und Engels. Kritisches und Selbstkritisches zu seiner Interpretation, *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*. Neue Folge 1994, S. 117-133.

//289/[512] 労働者階級の革命的党派にかんするカール・マルクスおよびフリードリヒ・エンゲルスによる把握の発展は、きわめて複雑なテーマであり、マルクスおよびエンゲルスの当時も、そして今日でも、最も激しいイデオロギー対立のある分野である。このことは、ほぼ1844年から1852年までの疾風のような10年間にもそっくりそのままいっそう特別な形で当てはまるのであり、その時期にこの党把握はその決定的な基礎を成立させ、その最初の大きな試練に耐えたのであった。

このテーマに取り組む現実的な必要性には、とりわけ4巻本のドイツ社会主義統一党(SPD)史の作業があって、その第1巻はかなりの程度、19世紀の党史に充てられており、マルクスの党理論の比較的甚だしい熟考を強いられる。しか

しながら、それを別にしても、社会主義および共産主義の建設過程におけるマルクス・レーニン主義党の指導的役割の合法的増大とともに、ほとんど同様に合法的な形でこの党の歴史とこの党にかんする教訓とへの社会的関心も増大する。

われわれの特殊テーマにはさらに次のような事情が付け加わる。すなわち、マルクスおよびエンゲルスの党把握の形成および初期の発展が根本的な役割を二重の点で演じたし、演じているということである。共産主義者同盟は、そのなかではじめてプロレタリア国際主義と民主集中制が具体化されたプロレタリアートの最初の革命党であったのみならず、同盟に対する態度が今日までも、ある党の性格を特徴付けるさいの試金石であり続けた。W. I. レーニンが他の

彼の同時代人と異なって、共産主義者同盟の遺産を研究し、そこから「なるほど小さいが、しかし本当にプロレタリア的な党」という言葉をつくり出した<sup>1</sup>のに対して、他方、マルクス主義に対するベルンシュタインの立論のかなりの部分は、マルクスおよびエンゲルスが共産主義者同盟の指導者として主張していたような党の戦略に対する攻撃から成っていた<sup>2</sup>。//290/共産主義者同盟に対する立場は、ある党を特徴づけるさいにきわめて証言力に富む基準である。レーニン以来、同盟に対して合法的後継者がとる創造的関係が、新しい型の党の本質的特徴である。他方、労働者階級の利益を改良主義および修正主義が裏切るさいには、共産主義者同盟を歴史から消し去ろうとしたり、あるいはその本質を歪曲しようとしたりすることを必然的に含むことも同様である。

プロレタリアの党を創設し、発展させ、確立

するためのマルクスおよびエンゲルスの実践的・政治的闘争にかんしては、多様な関連で彼らの党把握にも触れている膨大な文献がある。それらは個別的な叙述から比較的大きな総括および論点スケッチにまでわたっている<sup>3</sup>。さらに、これらの文献は、[513]党にかんするマルクスおよびエンゲルスの把握の形成、彼らの党概念の発展という特殊な視点のもとで、すでに60年代末にバルテルおよびシュミットによって妥当な形で総括された<sup>4</sup>。それは、ジョンストン<sup>5</sup>を別にすれば、われわれの知る限りこの種のこれまでで唯一の理論史的論文である。

ドイツおよびソヴィエト共同の資料集『共産主義者同盟』の出版は、革命党の最初の現象形態を資料に即して解明する新たな段階をもたらすであろう。

//291/ 全部で842の資料および745の注記を含む三つの巻によって新たに熟慮する<sup>6</sup>ための前

<sup>1</sup> Lenin, W. I., Werke, Bd. 19, S. 287.

<sup>2</sup> Vgl. Hundt, Martin, Zur Rolle der Sowjetwissenschaft und der deutsch-sowjetischen Zusammenarbeit bei der Erforschung der Geschichte des Bundes der Kommunisten. in: Beiträge zur Geschichte der Marx-Engels-Forschung und -Edition in der Sowjetunion und der DDR, Berlin 1978, S. 105 ff.

<sup>3</sup> ソ連およびDDRにおいて出版されよく知られたマルクスおよびエンゲルスの伝記の他に、とりわけ、Kandel', E. P., Marks i Engel's — organizatory sojuza kommunistov, Moskva 1953. — Förder, Herwig, Marx und Engels am Vorabend der Revolution. Die Ausarbeitung der politischen Richtlinien für die deutschen Kommunisten (1846-1848), Berlin 1960. — Kunina, V. E., Karl Marks i anglijskoje rabočee dviženie, Moskva 1968. — Schmidt, Walter / Dlubek, Rolf, Die Herausbildung der marxistischen Partei der deutschen Arbeiterklasse. Konzeptionelle Fragen der ersten Hauptperiode der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, in: ZfG, 14, 1966, 8, S. 1282-1333. — Schmidt, Walter, Zum Verhältnis zwischen dem Bund der Kommunisten und der I. Internationale, in: BzG, 6, 1964, Sh., S. 184-192. — Neef, Helmut, Der Kampf von Karl Marx und Friedrich Engels um die revolutionäre Partei der deutschen Arbeiterklasse, Berlin 1977を参照。

<sup>4</sup> Bartel, Horst / Schmidt, Walter, Zur Entwicklung des Parteibegriffs bei Marx und Engels, in: BzG, 11, 1969, 4, S. 568-602およびその拡大版 „Zur Entwicklung der Auffassungen von Marx und Engels über die proletarische Partei“, in: Marxismus und deutsche Arbeiterbewegung. Studien zur sozialistischen Bewegung im letzten Drittel des 19. Jh., Berlin 1970, S. 7-101を参照。Das Elend der „Marxologie“, Berlin 1975, 特に第4章をも参照。— Dlubek, Rolf, Revolutionstheorie und Parteauffassung bei Marx und Engels. Zu konzeptionellen Fragen in Forschung und Auseinandersetzung, in: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung, H. 7, Berlin 1980, S. 103-121.

<sup>5</sup> Vgl. Johnstone, M., Marx and Engels and the concept of the party, in: The Socialist Register, London 1967, S. 121-158.

<sup>6</sup> その最初の例として、Förder, Herwig, Zu einigen Fragen der Reorganisation des Bundes der Kommunisten nach der Revolution von 1848/49, in: Beiträge zur Marx-Engels-Forschung, H. 4, Berlin 1978, S. 23-67 [拙訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第2号, 1988年1月, 81~103ページ, 第3号, 同年4月, 49~59ページ, 第4号, 同年7月, 19~35ページ]を参照。

提がもたらされる。新メガ (MEGA) の作業も今や、マルクスおよびエンゲルスの創造の種々の時期について、われわれの——たとえば、1848/49年革命の諸教訓を理論的に仕上げることにかんしての、またチャーティズムを革命的にするためになされた、その範囲と意義についてなお充分には解明されていない、マルクスおよびエンゲルスの甚だ強靱な闘争にかんしての——テーマを学術的に深めるための貢献をなしうるまでに進捗した。

本稿において採られる共産主義者同盟の時期への集中が正当とされているのは、マルクスおよびエンゲルスによってはっきりと刻み付けられた同盟の本質および歴史的な位置を理解することが彼らの党把握一般を理解するための前提であるということによってなのである。エンゲルスが、しばしば引用されるゲルソン・トリエル宛の手紙のなかで1889年にもなお、彼およびマルクスが、いつかのある時期以来ではなくて、厳密に1847年以来、他のすべての党から分かれた、それら諸党と原理的に対立する「自覚した階級党」という考え方をつねに主張したということを強調したのはまさしくもっと深い理由があったのであった<sup>7</sup>。マルクスおよびエンゲルスが絶えず繰り返し1848年の経験に立ち返ったこと、また彼らがなぜにそのようにしたのかについて、レーニンが何度も指摘したのはまさにいわれがなかったのである。

同じ理由から、われわれによる党史、ドイツ

社会主義統一党史の構想は、その歴史が1946年ではなく、100年前、まさしく共産主義者同盟とともに始まるのが前提となる<sup>8</sup>。ここで大事なものは、[514]マルクスの党把握の根本的な考え方の再把握であるが、彼のその考え方は、正義者同盟および共産主義者同盟との関連において発展させられたのであり、また彼のその考え方は、党のそのつどの歴史的現象形態と党の本質との間には弁証法的関係が存在するというところにあるのである。客観的に目の前で行なわれている諸階級の闘争のなかで、合法的であるのは次のことである。すなわち、労働者階級は、階級として「対目的に」構成され、独自の運動を生み出し、この労働運動の最高の形態として、「完璧の唯一の保証 (die einzige Gewähr der Vollendung)」(マヤコフスキー)として、学術が装備された革命党を生み出すということであり、その党の——運動として理解された——目的はつねに、歴史のあらゆる高みと深みを貫き、何十年にもわたって動揺することなく、プロレタリアートの歴史的使命の実現、すなわち階級のない共産主義社会を建設するための闘争を指揮するところにある。それが共産党の本質であり、——マルクスの言葉では——「大きな歴史的意味における党」なのである。

//292/ 1847年の後にも絶えず発展し続けたマルクスおよびエンゲルスによる党把握には<sup>9</sup>、「大きな歴史的意味における党」と具体的に存在する党組織との区別と並んで、党「というも

<sup>7</sup> Vgl. MEW, Bd. 37, S. 326. — これは、エンゲルスがマルクス主義の党把握における決定的な転換点を正義者同盟から共産主義者同盟への再編と時期的には同一視していたということの意味する。

<sup>8</sup> Vgl. Geschichte der SED. Abriß, Berlin 1978, S. 8–16.

<sup>9</sup> それは、同盟の活動停止後の時期にもある範囲において、例えば、1853/54年頃のチャーティストとの緊密な接触との関連において、また1856年を熟考することとの関連において、妥当する (Hundt, Martin, Zur Kontinuität der deutschen Arbeiterbewegung vom Bund der Kommunisten zur Eisenacher Partei. Die Taktikdiskussion von 1856, in: BzG, 11, 1969, 4, S. 603–619を参照)。

の」の種々の発展段階における（彼らにあってはなるほど完全に首尾一貫してきちんと表現されはしなかったものの、しかしながら無条件に顧慮されるべきである）差異が存在する。どの階級闘争も政治的な闘争であるから、「プロレタリアートを階級に組織すること」のどれもが客観的には「政治的な党」を形成する傾向を持っている。しかしながら、その党は当初は甚だ弱い組織上の安定性しかもっておらず、いやそれどころかその党は「労働者たち自身のあいだの競争によっていつでも再び分裂させ」<sup>10</sup>られる。その党は、多くの助走の後にはじめて、比較的長期にわたる存続のための、それとともに首尾一貫した内的発展のための、そして外的な、全国的な活動のための力および堅固さをもつのである。『宣言』では党の形成のこの段階の一例として、10年以上にわたる闘争の後、イギリスにおいて1847年6月に10時間法が戦いとられたことを挙げている。ここで忘れられないのは、婦人および児童のための一日10時間への労働時間の制限は直接チャーティスト的な要求であったのではなくて、イギリスの産業で搾取されていた広範な労働者大衆の要求であったということである。

チャーティズムは、明確な組織形態でかなり長期にわたって存在し、厳密に定められた政治的諸要求を唱えた党であって、イギリスの産業プロレタリアートのすでにほぼ70年にわたる階級闘争の経験にもとづく、もう一つ上位の発展段階を、すなわち「プロレタリア党」あるいは

「労働者党」の発展段階を、早くも体現した<sup>11</sup>。「共産党」は、労働者党のこの一般的類型に属してはいるものの、しかし国際主義および運動全体の利害の意識的主張によってその一般的類型から際立っているために、まずもって、唯一の具体的な現象形態である共産主義者同盟<sup>12</sup>、すなわちマルクスおよびエンゲルスが彼らの在世中に構成員となった唯一の党、という形でのみ存在する。

『宣言』のなかでは、共産主義者たちが他の労働者諸党（それらの党の中には、さらにアメリカ合衆国（USA）における農業改革者（Agrarreformer）——「全国改革協会（National-Reform-Association）」——が数えられている）に所属することが強調されたが、それによって次のことへの視線がさえぎられてはならない。すなわち、ここには実にきわめて重要な質的飛躍があるということであり、また、この飛躍が（19世紀の半ばに）//293/イギリス、フランス、ドイツ、ベルギーにおける労働者諸党のメンバーのごくわずかの少数者たちだけによって果たされたのにはまさしくそれなりの理由があるということである。従来かならずしも十分に顧慮されてこなかったのは、個々の労働運動は社会主義理論、科学的共産主義を直接、媒介なしに受容することはできなかったのであり、実際には、すでに行動していた労働者諸党の最も進歩的な構成諸分子（正義者同盟の主要部分、チャーティストの左翼の若干の代表者たち）のみが受容したのであって、しかも自然発生的というには程

<sup>10</sup> MEW, Bd. 4, S. 471.

<sup>11</sup> Vgl. ebenda, Bd. 2, S. 444.

<sup>12</sup> エンゲルスはすでに1845年に、社会主義理論の受容によって、チャーティズムで達成された段階が乗り越えられる必然性をはっきりと書いていたし、この発展の帰結を「新たに生じる党（neuentstehende Partei）」と呼んでいた（ebenda, Bd. 2, S. 453）。

遠く、大きな諸困難（例えば、プロレタリア [515] 手工業者にとって存在する、その将来の階級的地位を「本能的に予見する」<sup>13</sup> 必然性）および活発なイデオロギー闘争のただなかで受容したのであった。マルクス主義は労働運動と融合して革命的な共産党となったのだが、その融合は、すでに多年にわたる自身の努力のなかで労働者共産主義の種々の理論が発展させられていたのみならず、それらの理論が階級闘争のなかで浮上する諸問題の回答としては必ずしも十分でないためにすでに多かれ少なかれ何度か拒絶されていたところでのみなされたのである<sup>14</sup>。

共産主義者同盟は、構成員および高度に発展した党の構造と規約および綱領をもつ実体的で明確な組織であり、「他の労働者諸党に対抗する」特別なものでない<sup>15</sup> こともはっきりしており、また、——他のプロレタリア党に比べてのその区別的諸指標によって——いわば「大きな歴史的意味における党」を直接に体现している一部、それゆえ厳密には分けられず、「万国の労働者党の、実践的には最も断固たる、ますます推進していく部分」<sup>16</sup> ——歴史的に必然的なより高度の段階へ向かう党形成の過程の酵母であり、触媒でもある。第一に、その特色をなしているのは、この労働者党がもはや個々の社会的要求（10時間労働日、諸連合、労働の権利等）

ないしはブルジョア民主主義の枠内での個々の政治的権利（例えば、憲章）だけを唱えるのではなくて、その階級の状態およびプロレタリアートの歴史的使命を明瞭に認識して、「ブルジョアの転覆、プロレタリアートによる政治権力の奪取」<sup>17</sup> をその綱領の旗の上に書きしるすということである。

共産主義者同盟のこの二重性はその本質の認識を著しく複雑にしているが、そこになお、/ /294/同盟の歴史の経過の中でこれらの異なった側面がきわめて異なった規模で出現したり、後退したりしたという事情が付け加わる。

はじめからして見当違いも甚だしいのは、共産主義者同盟に、そのわずかの構成員数のために党たる地位を否認しようとすることである。従来見積もられてきた約400名の同盟員の少なくとも2倍を最新の諸研究が枚挙し得ていることを別にしても、同盟は（いずれにせよイギリス以外では産業プロレタリアートの未発展というリアルな認識をもっていたため）、自身が直接に大衆党となるのではなく、他の労働者諸党を労働者階級の歴史上の有効な梃子に発展させることをその目標にしてよかった。すでに1847年にマルクスは、イギリスやフランスの労働者の新聞雑誌の発行に、チャーティストたちの活動に、プロレタリアートが「ますます共産党に」<sup>18</sup> 同調している例証を見た。1848年から

<sup>13</sup> Ebenda, Bd. 21, S. 211.

<sup>14</sup> したがって、個々の点では価値ある著作であるBrandenburg, Alexander, Theoriebildungsprozesse in der deutschen Arbeiterbewegung. 1835–1850, Hannover 1977も、労働者共産主義の過大評価というその基本傾向のなかで、革命党の形成という決定的な問題を無視している。

<sup>15</sup> MEW, Bd. 4, S. 474.

<sup>16</sup> Ebenda.

<sup>17</sup> Ebenda. — ある意味において、1850/51年にブランキ主義とチャーティズムの左翼がこの発展段階まで接近したのであって、これはとりわけ「革命的共産主義万国協会 (Weltgesellschaft der revolutionären Kommunisten)」を創設することに現れた。

<sup>18</sup> Ebenda, Bd. 4, S. 194.

1850年にかけて、数万人の会員を擁するドイツ人労働者親睦会を創設し、初期の障害を乗り越えて発展させるのにわずか1ダースの同盟員で足りたとき、さらに同盟が[516]1851年春にチャーティスト左翼のわずかの同盟員によってこの党全体のために「宣伝綱領」の起草を果たしたとき、まさにそうしたとき、それらこそが、いくつかの非常に小さな地域的な諸班を創設したり、組織内の回状を起草したりすること——それは、なるほど比較的容易に同盟の現象形態として認識され表現できるものであり、またマルクスおよびエンゲルスが当該時期に一度たりとも、そしてまったく軽視しなかったものであるが——よりも、マルクスおよびエンゲルスが共産党という言葉で理解していたものを実現するはるかに本質的な措置なのであった。

党形成の過程の合法則性の基礎には、資本主義社会秩序の根本矛盾と、幾多の搾取され抑圧されたプロレタリアートおよびその他の仕事を行なう諸階層の形成および発展とがある。「プロレタリアートは、種々の発展段階を通過する。ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争はその存在とともに始まる」<sup>19</sup>。それにもかかわらず、この発展は自然発生的に進むのではない。党形成の過程はこの闘争の主体的要因であり、その要因は一定の相対的に高い程度の政治的経験、理論的教養および組織上の手腕を必要とする。

「党」は歴史的にはもちろん抽象的な概念としてではなく、具体的に存在する組織として作用する。しかしまた、党の最初の実存形態以来形成し、それについて自己を持続的にさらに発展させる意識と、党綱領や党形成、党の戦略や

戦術にかんする一般に妥当する教訓や経験とが、社会的に作用する力であることができる。このような事情がマルクスおよびエンゲルスをして、革命党の具体的に組織された形態が存在しなかった時期においてさえ、しばしば「党」を語ることを可能にしたのである。

「マルクス党」という、われわれの論敵たちによってあまりにも使い古されたうえに、完全に誤解されている言葉//295/——この言葉は19世紀にときおり党の代表者たち自身によってもある特定の関連で用いられたのだが——になんらかの正当性がある場合、それは「大きな歴史的な意味での党」という諸原理の一つの言い換えをしていたという意味でだけなのである。マルクスに対する信仰告白は、ここでは、客観的に不可避の革命党という使命への信仰告白だったのであり、所与の歴史的諸事情によって多少とも大きなしっかりと組織された党が許されなかったときには、なおさらそうだったのである。それゆえ、1852年以後、「マルクス党」と自称したのは、考えを同じくする人々の小集団であって、彼らはただ文通によってのみ、また一部は同時平行して行われ、ある程度までは相互に一致した理論的研究および若干の実践的な歩み(とりわけ新聞雑誌類および書籍出版の分野でのそれ)によってのみ、相互に結び付けられていた。つまりは、マルクス、エンゲルス、ヴィルヘルム・ヴォルフ、アーネスト・ジョーンズ、ゲオルク・エッカリウス、エルンスト・ドロクケ、ヨーゼフ・ワイデマイアー、アードルフ・クルス、カール・プフェンダー、フリードリヒ・レスナー、ヴィルヘルム・リーピクネヒトおよびその他のわずか数名である。

<sup>19</sup> Ebenda, S. 470.



革命党の本質と現象は、二つの不可分な弁証法的に相互に関連した、客観的な社会の現実の側面であるが、しかしそれらはその不可分の連関にもかかわらず、決して直接に一致することはない。しかしながら、具体的な組織上の現象としての共産主義者同盟は、そのなかで、共産党の本質の非常に多くのものを体現した。それゆえ、本質と現象との統一にかんするレーニンの「本質は現象する。現象が本質的なのである」<sup>20</sup>という言葉が理解されるならば、共産主義者同盟のことももっともなことと考えることができる。しかしながらまた、この統一に矛盾した性格があること、本質と現象との統一は普遍的なものと個別的なものととのあいだの矛盾に基礎をもつことが顧慮されてしかるべきである。それゆえ、共産主義者同盟の歴史の具体的・歴史的現象形態のどれ一つでさえもが、党の普遍的本質の直接的な表現と理解されてはならないのである。つまり、たとえ、レーニンが述べたように、それが現象において本質よりも「いっそう豊富」であるにしても、つねに歴史的な相面が、個別的なものの限界が注意されなければならないのである。

本質と現象とのあいだのこの弁証法的矛盾というのは、[517] 道徳的な範疇であるところの理想と現実と決して同じものではない。まさしくマルクス・レーニン主義の党概念は、なるほど大きな歴史的な意味での党には賛成するが、しかし所与の時期に存在する党組織には反対するといった類のどのような中途半端も許さない。唯一許される批判は、当該階級の組織化をいっそう発展させるために積極的に参加する個人的闘争という批判である。そのための具体的材料

を提供しているのが、正義者同盟、ケルン労働者協会、労働者親睦会のなかでの、またチャーティストたちのそばでの、そして、ロンドン労働者教育協会等のなかでの、マルクスおよびエンゲルスの活動である。

弁証法的唯物論からすれば万物は、したがってどのような事物の本質も、(たとえ具体的な現象としては本質的にかなり長期のテンポであっても) 変化するので、論理上生ずるのが、革命党の本質について共産主義者同盟の時期以来にながら変化したのかという問題である。//296/この問題はこれまでまだ議論されたことがない。まずはじめに説明されるべきであると思われるのは、党のこの本質をどのように「狭義に」あるいは「広義に」定義してよいのかである。反論の余地がないように思われるのは、党は——ある程度、その本質の核心においては——階級の無い社会をめざす闘争における労働者階級の意識的な先遣隊であったし、現在もそうだということである。しかしまた、同様に、反論の余地がないように思われるのは、共産主義者同盟には党の本質にかんするわれわれのこんにちの尺度は、媒介なしには当てはめることができないということ、あるいは、例えば、19世紀末の革命的な社会民主党の型からレーニンの新しい型の党への移行もまた本質にかかわる飛躍であるに違いないと思われるということ、である。党の普遍的な概念と、この概念と多少とも近接する、具体的に存在する諸党(それらの総和のなかで本質上はじめて概念の形成のための基礎を提供したのだが)との必要な区別は、その必要がなかった場合には、必ずしもなされなかったし、マルクスおよびエンゲルス自身によって

<sup>20</sup> Lenin, W. I., Aus dem philosophischen Nachlaß, Berlin 1958, S. 188.

さえ、とりわけ彼らの往復書簡のなかでは、なされなかった。しかしながら、この区別を欠くと、それが思考上の明瞭さの欠けている表現であった場合には、例えば、共産主義者同盟のケルン中央指導部が、おそらくハインリヒ・ビュルガースの手によって、1850年12月1日付の規約のなかに、同盟は解体されないと書いたときには、非常に重大なものとなった。当然、どのような組織も、——事実上「解体されないと」ころの大きな歴史的な意味における党とは別に——諸事情がそれを求める場合には、解体されるのである。

ここには、共産主義者たちは「プロレタリアートとブルジョアジーが通過する種々の発展段階において、運動全体の利害を代表する」<sup>21</sup>とある『共産党宣言』第II章の一節の不正確な解釈がある。この命題は、ほとんど文字どおり1850年12月の規約のなかに受け容れられたが、しかしそれにもかかわらず、その命題が同盟のための綱領的確定という直接的な目的のほかに、どんな共産党の本質をも描く多くの契機をそれ自身のなかに秘めていたことに顧慮しなかった。

同盟史の研究者たちにとって、解散の問題は非常に厄介である。1851年5～6月におけるケルン中央指導部の構成員の逮捕によって、計画されていた第III回大会という事態にはもはや至らず、また、新しい中核となる同盟指導部が築かれるということももはや不可能となった。それゆえに、同盟の解散不能性にかんする綱領的

見地を失効させ、そして同盟を解散させるための、規約にかなった正当性をもった委員会は存在しなかった。マルクスはこの状態から、1852年11月に周知のように、彼によって指導されていたイギリスにおける同盟の組織を解散するという、またさらに大陸での存在ももはや時流に適っていないと付け加えるという、唯一可能な解決を引き出した<sup>22</sup>。この//297/決定は、[518]実質的にはただマルクスのエンゲルス宛手紙の形でだけ存在し、この形で1860年にも、実現しなかったフォークトに対するベルリン訴訟のなかで罪体 [corpus delicti] として役立ったが、しかし、まったく明白なのは、この決定は1852年には、ドイツに引き続き存在していたわずかの同盟班にも、ロンドン地区がその指導地区であった合衆国の同盟員たちにも伝えられなかったことである。(合衆国は、1852年11月の決定では話題になっていない！)

これらの具体的な歴史的根拠すべてからみて、1851年ないしは1852年の後にも同盟のなんらかのその後の存在があった。ニュー・ヨークの共産主義者クラブ (1857～1867年)<sup>23</sup> は、実際にはそうではなかったが、同盟の継続とみなされた。フリードリヒ・レスナーは第一インターナショナルについて、それは「たとえ別の姿をとろうとも、古い解体した共産主義者同盟 (Kommunistenbund)」の復活である、と書いた<sup>24</sup>。ヴィルヘルム・リープクネヒトは、後に何度かかつての同盟について語ったが、アイゼ

<sup>21</sup> MEW, Bd. 4, S. 474.

<sup>22</sup> Karl Marx an Friedrich Engels, 19. 11. 1852, in: MEW, Bd. 28, S. 195. — エンゲルスは後に一度、同盟は「崩壊した」と表現した (ebenda, Bd. 16, S. 361参照)。

<sup>23</sup> Rumjanceva, N. S., Kommunističeskij klub v N'ju-Jorke (1857–1867), in: Marks i nekotorye voprosy meždunarodnogo rabočego dviženija XIX veka, Moskva 1970, S. 339 bis 417.

<sup>24</sup> Leßner, Friedrich, Vor 1848 und nachher, in: Ich brachte das „Kommunistische Manifest“ zum Drucker, Berlin 1975, S. 98.

ナツ八党の創立大会で共産主義者同盟について、それは「私が今日それに属しているように、私が当時属していた古い共産党」である、と言った<sup>25</sup>。このような確認がまったく散発的なままに終始しなかったのは周知のことである。したがって、興味深いのは、かつてヴィルヘルム・ブラッケが社会民主労働党の構成員を、ラサール派の人々とは異なって、共産主義者たちと呼んだことである。つまり、ゴータ合同大会の前の折衝のあいだ、彼は1875年3月23日にペーベルに宛てて党綱領にかんして次のように書いた。すなわち、「原理的な部分はあまりに一般的であるだろうから、双方とも、すなわち、われわれ共産主義者たちとラサール派の人々は綱領に署名することができるであろう」<sup>26</sup>。

最も首尾一貫した理論的に最も考え抜かれたこの問題についての表明はマルクスのものである。それはフライリヒラートへの手紙における周知の、しばしば誤解されている次の章句である。すなわち、「「同盟」は、パリの四季協会同様、何百もの他の結社同様、近代社会という地盤のいたるところから自然成長的に形成される党の歴史における単なる一つのエピソードにすぎなかった」<sup>27</sup>。

何百というそのような労働者党は——少なくとも1860年までには——存在しなかったし、共産主義者同盟はその歴史的意義においては単なる一つのエピソードとはまるで違ったものであった——この表現は、印刷物のために書かれたのではないこの手紙の成立事情から明らかとなる——が、しかしながら、党形成の過程の合法則

的なもの、客観的なものについてのマルクスの暗示も、//298/大きな歴史的な意味での党と具体的な組織としての党とのあいだの彼の区別もまったくはっきりと明らかになる。

マルクスの党概念のこれらの基本的構成要素はずっと前から形成されていたのであって、それらを、名目的には二つの、場合によっては原理的に矛盾する、マルクスにおける党概念の存在と理解してはならない。すでに1844年末にマルクスは次のように書いていた。すなわち、1789年以来、社会主義サークル (cercle social)、バプーフの陰謀およびブオナルローティからはじまるネオバプーフ主義のような非常にさまざまな組織上の形態で、「新しい世態の理念」が表明された<sup>28</sup>、と。マルクスが当時まだ正義者同盟に加わらなかったのはそれが陰謀的なためであった。

「大きな歴史的意味における党」という概念は、ブルジョア・イデオログたちがマルクス・レーニン主義的な党把握を歪曲するさい、ほとんどすべての歪曲の軸心にされていた。そこでは、マルクスがこの表現で、プロレタリアートの歴史的使命を実現する党の役割を指示していることが完全に無視される。この明白な階級的内容を否定するとともに、さらには具体的な、確固として組織されたプロレタリアの党組織が必要なことも脱落する。だから、ハンス・モムゼンにあってはこうである。すなわち、マルクスの党把握は「ドイツのブルジョア急進主義の党概念に」照応していたのであって、「その概念は「運動の党」を、特定の政治的組織として

<sup>25</sup> Protokoll über die Verhandlungen des Allgemeinen Deutschen Sozialdemokratischen Arbeiterkongresses zu Eisenach am 7., 8. und 9. Aug. 1869, Leipzig 1869, S. 43.

<sup>26</sup> Kundel, E., Neue Bracke-Briefe zum Gothaer Vereinigungskongreß 1875, in: BzG, 19, 1977, 4, S. 613.

<sup>27</sup> MEW, Bd. 30, S. 490.

<sup>28</sup> Vgl. ebenda, Bd. 2, S. 126.

把握したのではなくて、時期ごとの、自己を実現しそれによって自らを廃止する傾向として把握した」というのである。それゆえ、マルクスは、「プロレタリア運動のそのつどの具体的組織が彼にとって重要でなかったあいだは」、イデオロギー的歪曲を防ぐことだけに尽力したというのである<sup>29</sup>。このブルジョアの判断とほとんど一致しているのは、極左グループ [519] 「イル・マニフェスト」の判断であって、それによれば「マルクスに党の理論は存在せず」、また、マルクスは「プロレタリアートには特殊かつ独自の組織の形態および表現形態はなんら必要ない」と確信していたというのである<sup>30</sup>。

さらに、きわめて流行しているこれらの歪曲の変種は、まったく具体的なやり方で共産主義者同盟の時期に適用されたのであって、次のように言われる。「1848年の革命に至るまでは、『労働者党に対するなんら特別の党ではなく』で、『つねに運動全体の利害を』代表しようとした。しかしながら、共産主義者たちは……まず少数者の革命的な指導者の党を形成したのではなかった。……革命の敗北の後にはじめてマルクスは、ブルジョア層および小ブルジョア層の拒絶、さらに最後には労働者層の拒絶への失望から、後にレーニンによって取り上げられる、「永続革命」を貫徹するための位階制的な、厳格に集権化された指導者組織の構想を//299/主張した<sup>31</sup>、と。共産主義者同盟の規約は革命の

前の年に確定されたということ、『宣言』はきわめて堅固に組織された一組織の綱領であったということ、ブルジョア諸勢力のイニシアチブの欠如およびこの欠如への言うところのマルクスの失望は共産党の性格に特定の影響をもはやまったくもちえなかったであろうということ、革命後の同盟の組織構成およびその諸課題について根本的なものはなんら変更されなかったということ——これらすべてを、上に引用した文章の二人の著者のうちの少なくとも一方は非常に正確に知っているが、しかし、ドーヴェは、この時期にかんする甚だしく資料の豊富な書物を編集したというのに<sup>32</sup>、共産主義者たちにあまりにもしばしばあまりにも好んでなすり付けられるイデオロギー的の偏見によって、歴史的に正確な判断を妨げられた。

いずれにせよ絶対に確かであるのは、マルクスおよびエンゲルスにおける「大きな歴史的意味での党」という概念は、強固な党組織を断念するのとはなんらの関係もないということである。エンゲルスが1852年に「しかしながらどのような政治的党派も組織なしには存在することができない」<sup>33</sup>と確認したとき、彼は補強してこう付け加えた。すなわち、労働運動のための——当時の諸事情の下では遺憾ながらただ秘密同盟としての——この組織は、自由主義的なブルジョアジーないしは民主主義的小ブルジョア層のための対応する諸党と比べてなおはるかに

<sup>29</sup> Mommsen, Hans, Arbeiterbewegung, in: Marxismus im Systemvergleich Geschichte, Bd. 1, Frankfurt a. M./New York 1974, Sp. 142 f.

<sup>30</sup> Partei und Klasse. Eine Diskussion zwischen Jean-Paul Sartre und „Il Manifesto“, eingeleitet von Rossana Rossanda, (West-) Berlin 1970, S. 7.

<sup>31</sup> Programmatistische Dokumente der deutschen Sozialdemokratie, hrsg. u. eingeleitet von Dieter Dowe u. Kurt Klotzbach, Bonn / Bad Godesberg 1973, S. 9.

<sup>32</sup> Vgl. Dowe, Dieter, Aktion und Organisation. Arbeiterbewegung, sozialistische und kommunistische Bewegung in der preußischen Rheinprovinz 1820–1852, Hannover 1970.

<sup>33</sup> MEW, Bd. 8, S. 398.

重要であったのだが、その理由は、プロレタリアートが後二者のような良好な「社会的地位」および「経済状態」をもっておらず、さらに「彼ら構成員相互の旧来の日常的な個人的交流を」党組織のための時々の補充として用いることができなかったためである。ほとんど文字通り同一の表現をマルクスは彼の『ケルン共産党裁判にかんする暴露』の第VI章の初めで行なった<sup>34</sup>。

これは、マルクスおよびエンゲルスが1852年11～12月に、したがってまさに解散決定の日々に、プロレタリアートの党組織の必要性および諸条件をどれほど徹底的に熟考したかを示している。彼らは労働者階級の一組織の解散をなにか積極的なこととは決して見なさなかったのであって、[520] 彼らは、例えば70年代以降、国家権力による一組織の完全な解体を不可能にした諸要因の（とりわけ増大する大衆的土台の）発展を注意深く心にとめた<sup>35</sup>。しかしながら、これは共産主義者同盟の時期にはまだあてはまらなかった。

同時に、マルクスおよびエンゲルスは、『宣言』において、その他の労働者党と共産主義者たちとの区別を定義するさい、彼らの党把握の二つの根本的な構成要素を示唆した。すなわち、第一に、共産主義者たちは「プロレタリアの種々の国民的闘争のなかで、国民性から独立したプロレタリアート全体の利害」を強調し、//300/ 第二に、彼らは「プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの闘争を貫く種々の発展段階において、つねに運動全体の利害を……」<sup>36</sup> 代表

する。要するに、共産主義者たちは、とりわけ、戦略と戦術の確定にさいして、国民的なものと国際的なものとの、ならびに現在のものと将来のものとの弁証法の習得において際立っている。

マルクスおよびエンゲルスが何度も、そしてまったく誤解の余地なく強調したのは、真のプロレタリア党はプロレタリア国際主義の党でなければならないということである。すでに1847年6月に、彼らは第一回大会で同盟の改組過程に、「万国のプロレタリア、統一せよ！」という標語を持ち込み、そしてそれは党の本質にかんする決定的なものを表明していただけに、こんにちまで、共産主義的世界運動の標語であり続けることができた。

エンゲルスは1877年に共産主義者同盟にかんしてこう書いた。すなわち、同盟は、「労働運動全体の国際的性格を強調し、さらに実践的に確証した……」<sup>37</sup> 党の最初の組織形態であった。すなわち、エンゲルスは、国際主義を、具体的に存在するどの党もがその理論的な活動においても、実践的・政治的な活動においても正当に評価しなければならない客観的に与えられた必要性と把握した。

すでに『宣言』のなかで、プロレタリアートの解放闘争はまずもって国民的粹組のなかで始まり、そして「決してブルジョアジーの意味においてではないとはいえ」<sup>38</sup>、なお国民的な経路をとるということが断言されていた。マルクスおよびエンゲルスはつねにチャーティストたちの活動を歓迎したし、彼らは1848年春と1849年春に共産主義者同盟の先頭に立って同じような

<sup>34</sup> Vgl. ebenda, S. 458.

<sup>35</sup> Vgl. z. B. ebenda, Bd. 19, S. 6.

<sup>36</sup> Ebenda, Bd. 4, S. 474.

<sup>37</sup> Ebenda, Bd. 19, S. 97.

<sup>38</sup> Vgl. ebenda, Bd. 4, S. 479.

大衆党をドイツに創設するための措置を講じたし、1850年春には「三月の呼びかけ」のなかで、新しい革命闘争の結果として、ドイツに還る中央指導部の第一の課題として、労働者諸団体を国民的枠内で結集することを挙げた<sup>39</sup>。しかしながら、マルクスおよびエンゲルスは国民的大衆党の創出という課題を革命の時期と結び付けて見ていたのではなかった。というのは、1854年にもマルクスは「国民的規模での労働者階級の組織を」マンチェスターにおける労働者議会の「偉大で輝かしい目標」と称したからである<sup>40</sup>。

マルクスおよびエンゲルスは、党における国民的なものと国際的なものとの関係を、非常に弁証法的に把握した。したがって、マルクスは70年代末に、当時存在した国民的諸党を、  
//301/国際労働者協会が到達していた以上にいつ  
そう高度な国際主義の段階であると述べた<sup>41</sup>。

疑うべきなんらの理由もないのは、このような労働運動全体という国際的な見地が共産主義者同盟の時期にはまだマルクスおよびエンゲルスの党把握の特徴をなしてはいなかったということ、したがって彼らはチャーティストたち、ブランキ主義者たちおよび労働者親睦会等々の活動すべてを、ともに運動の国際的性格の現れと把握していたということである。それにもかかわらず依然として問われるべきは、彼らは種々の時期の党の組織構成のためにそこからどのような結論を引き出したのかということである。

革命党の第二の欠かせない前提は、科学的共産主義の受容、研究および不断の創造的ないっ

その発展に等しい歴史の歩みへの理論的見通しである。[521] それは、綱領上の明瞭さを求める首尾一貫した闘争において、およびもっぱら労働者階級の革命的利害の表現である理論のあらゆる偏向に対する仮借なき論戦において、はっきりと示される。

マルクスおよびエンゲルスは1844年以来、正義者同盟の、さらにはその他の労働者党の綱領的発展に対して、最大の注意を払った。彼らの諸活動の最重要の諸過程がこの問題に捧げられていた。つまり、彼らは、相互の協定によって、同盟の綱領を仕上げるさいに主導的に協力し、1847年1月にはとうとう同盟員となり、そしてここから最終的には彼らが『宣言』を執筆するということが生じて、その『宣言』は本来の党創設の最高の表現となったのであるが、それも、『宣言』がまさしく客観的に必要な理論的洞察を体現し、裏書きしたからなのである。無論、当時も今もできるだけよい綱領をもつことのみが重要なのではない。それをもつことは党全体のイデオロギー的・政治的統一の核心部分であり、結晶化の中心点でありうる「だけ」であって、党全体のそうした統一がこれまた同様に統一的でまとまりある行動の前提なのである。

同盟の第一回大会と第二回大会のあいだの時期すなわち1847年9月に、組織全体がマルクス主義を受容し、それによって10年来未解決であった綱領問題を解決することを目指す闘争が最後の決定的な段階に達していたときに、ロンドンの中央指導部——マルクスおよびエンゲルスは当時そこに属していなかった——はこう強調し

<sup>39</sup> それについて、現存する地域の労働者協会の統合が依然として数十年間、ドイツにおけるプロレタリア大衆諸党の形成の可能性を残していたことが想起されるべきである。

<sup>40</sup> MEW, Bd. 10, S. 126.

<sup>41</sup> Vgl. ebenda, Bd. 19, S. 147.

た。すなわち、「われわれは、パリの共産主義者たちに、しっかりと団結し、誤まった考え方が諸班からなくなるように活動することを求めた。グリーンおよびブルードンの追隨者たちが彼らの基本諸命題をあくまでも固持するといふのであれば、彼らが紳士であり続けようとするならば、彼らは同盟から脱退し、自分だけのために活動しなければならない。わが同盟にはただ共産主義者たちだけがいることができる」<sup>42</sup>。

1885年のゲオルク・アードラーから今日のブルジョア的著述家たちに至るまで、同盟員間の甚だしい理論的落差の例を時々指摘するさいに//302/必ず付いて回ったのは、結論を引き出す巧みに優劣がありこそすれ、同盟には統一的なイデオロギーがまったく存在していなかったということである。世界の政治運動のなかで、共産主義的運動ほど理論的・世界観的諸問題を過去においても現在においても真剣に扱っている運動はなく、それを物語る豊富な例を提示しているのがまさに正義者同盟および共産主義者同盟における綱領的發展であることを別にしても、さらに、1850年に共産主義者同盟のなかで、同盟員の第二の範疇を作り出す努力があった。しかもそれは、なんらフリーメーソン風の階級制のためではなく、ただ単に、数多くの新加入に直面して、困難な非合法の諸条件の下で、党のイデオロギーの統一の水割りを許さぬためであった。マルクスおよびエンゲルスによって起草された「六月の呼びかけ」においては、「革命上有能であり頼りになるが、しかし現在の運動の革命的帰結をまだ理解していない……」「断固として革命的な人々」が話題となってい

る<sup>43</sup>。

共産主義者同盟におけるマルクスおよびエンゲルスの活動を分析することによって、革命理論のすべての敵対者に対して遠慮会釈なく論戦することがなるほど彼らの党把握の不可欠の構成要素であるとみなさざるを得なくなる。革命党は、科学的共産主義を受容することによってのみ発生することができ、またその不断の適用およびいっその発展によって活動することができるので、理論的明確さを求める闘争は——心理学的マルクス歪曲が想定しているような——マルクスの不寛容の結果などではなくて、[522] 前進している階級組織どれもの生活原理なのである。例として、1844～45年のカペー主義との、1845～46年のヘスおよびクリーゲの「真正」社会主義との、1843年から1847年までのヴァイトリングの見解とのそれぞれの論争が引き合いに出されてよいであろうが、想起されてよいのは、『宣言』のなかで一章全部が社会主義のその他の捉え方との論戦に割かれていたことである。

マルクスおよびエンゲルスが党についても具体的な考えのなかにあったのは、党における理論的討議と論戦——そしてそれは志を同じくする人々の間での、当然共通の共産主義的理念および共産主義的理論の基盤の内部での討議である——は、事情によっては必要となる組織上の諸結論とはまったく別でなければならぬということである。マルクスは、1850年9月15日の中央指導部の会議——そこでは、彼が分派に抗議したほどの状況で、絶対的な分界があったのだが——での彼の発言においてこう強調した。すなわち、『宣言』の普遍的な見方の代わりに、

<sup>42</sup> BdK, Bd. 1, S. 536.

<sup>43</sup> MEGA<sup>2</sup>, I/10, S. 340.

ドイツの国民的な見方が主張されている……。『宣言』の唯物論的な見方の代わりに、観念論的な見方が強調されていた。現実的な諸関係の代わりに、意志が革命における主要な事柄として強調されていた……」<sup>44</sup>。

すでに『宣言』のなかで強調されていたのとまたしてもまさしく同一の党にかんする根本的把握である。すなわち、国際主義、唯物//303/論的世界観、闘争の事実的諸条件への学術的見通し。

マルクスおよびエンゲルスの党把握においては、党の合法性と非合法性とは、厳密にまた形而上学的に切り離されていたのではないし、相互に排除し合う概念でもなかった。共産党が19世紀の半ばには、例外的な場合を別にすれば、公然と、合法的に現れることができなかったということがたとえ歴史的に所与の事実であった<sup>45</sup>とはいえ、マルクスおよびエンゲルスの把握に照らせば、それは決して公然と現れそして活動することを断念したということの意味したわけではなかった。彼らは、諸セクトの運動という客観的には克服された時期の特徴的指標である小さな、エリート的な、非民主的な秘密サークルへの後退を非難した。「共産主義者として公然と現れ出ること」<sup>46</sup>が決定されたことは、ロンドンの1847年12月の第二回大会の10日間にわたる討論において明らかにされた綱領上の重要点の一つであった。

「三月の呼びかけ」のなかで、すなわち、先鋭化する反動化の時期ではあったが、しかし、すぐ間もなく起こるであろう革命の高揚への期待がまだあった時期に、同盟に、「公認の民主主義者たちと並んで、労働者党の独立の、秘密および公然組織をつくり出す……」<sup>47</sup>という課題が立てられた。

マルクスおよびエンゲルスは、すでに彼らの労働運動との結びつきの初めに、したがって、1843～44年以来、こう把握していた。すなわち、外から強いられた厳しい非合法性という諸条件の下でも、内部組織的にも、セクト主義および独裁的指導方法が克服され、民主集中制が貫徹されなければならない、外に向かっても、共産主義的宣伝によって可能なあらゆるやり方で現れ出なければならない、と。『宣言』のなかでは、導入部ですぐに、「共産主義者たちが、彼らの見方、彼らの目的、彼らの意向を、全世界の前に公然と示す」時であるばかりか、「好機」であるということが強調された<sup>48</sup>。

さらに、マルクスおよびエンゲルスが「共産党」という名前をことさらに取り入れたのは、秘密の共産主義者同盟を公然と語ることができるようにするためであったということをつくかのことが物語っている。1848年春に同盟がそれらとともに現れ出た二つの綱領的文書、『宣言』および17の『要求』にも、その名前が用いられたし、後にエンゲルスは一度書きさえし

<sup>44</sup> Ebenda, S. 578.

<sup>45</sup> マルクスの把握によれば、「プロレタリア党は大陸において」1848/49年の革命の間、「新聞雑誌・言論の自由および結社権、すなわち、党組織の法律的手段」(MEW, Bd. 8, S. 458)を持っていた。だが、共産主義者同盟は組織としては非合法のままにとどまっていた。それゆえ、現存する法律的手段の首尾一貫した利用は完全な合法性と同一ではない。

<sup>46</sup> MEW, Bd. 27, S. 109.

<sup>47</sup> Ebenda, S. 259 (強調は筆者による - M. H.).

<sup>48</sup> Ebenda, Bd. 4, S. 461.



た<sup>49</sup>し、エンゲルスおよびマルクスは自分たちのあいだで同盟を一般にその名前で呼んでいた。

できるだけ大々的にまた多面的に現れ出るといふこのような努力から、//304/自らの機関紙誌 (Organe) を創刊したり現存の機関紙誌を利用したりするマルクスおよびエンゲルスの活動すべても発していた。公然たる活動を目指すこのような自身の努力、効果的でない秘密サークルから脱出することを目指す努力のまた別の表現であったのは、[523] 革命のさなかに、あらゆる可能性を利用すること、すなわち、『新ライン新聞』およびその他の機関紙誌 (Presseorgane) とならんで、労働者協会、民主主義協会と諸結社および議会の演壇を利用することである。このような努力のなかで、彼らは秋にはモルおよびシャッパーのような経験豊かな同盟員たちとともに戦闘の危険さえ冒したのであった<sup>50</sup>。

党の歴史の10数年をずっとさまざまな相面で貫いていた問題は、党が選挙に関与すべきかどうかにある。組織としてはまだ十分に公然と現れ出ることにはできない共産党が、しかし革命においては集会・言論・出版の自由の可能性すべてをどのように利用することができ、実際に行動しなければならなかったのが、問題性の相面の一部分である。(選挙参加が過大に評価され、党の全活動におけるその相対的な意義があまりに甚だしく強調されすぎて、それが党の革命的性格に歪んだ反作用を及ぼすのは、ずっと

後の問題である。)

マルクスおよびエンゲルスが主張した見解は、あらゆる場合に独自の候補者が立てられなければならない、候補者はできるだけ同盟員であるべきだが、それでなければ同盟に近い一貫した民主主義者あるいは諸労働者協会の代表者であるべきであって、そうしてこそ、諸勢力を結集して算入し、政治的な経験を集めて、あらゆる政治的な演壇を利用することができるというものであった。同盟員たちの議会活動は、従来述べられていた以上に大きなものであった。たとえ非常に短かったとはいえ、フランクフルト議会におけるヴィルヘルム・ヴォルフの輝かしい活動があった<sup>51</sup>だけではなく、カール・デスターはベルリン議会において非常に積極的な議会活動を行なった<sup>52</sup>し、ルートヴィヒ・シュテヒヤンはハノーファーの市会議員であったし、フリードリヒ・マルテンスはハンブルク市議会の永年にわたる議員であった。これらの枚挙がすべてを尽くしたものでないことははっきりしている。しかしながら、ブリュッセル共産主義通信委員会が1846年7月にノッティンガムにおけるファergus・オコンナーの予備選挙の成功をきっかけに呼びかけを起草したが、そのなかで「最近の普通選挙に際して、投票しに行くという [その (オコンナーの)] 見解」が、彼が新しい政治的諸使命を「十分に意識」していたことの表徴とみなされた<sup>53</sup>。

<sup>49</sup> Ebenda, Bd. 21, S. 16.

<sup>50</sup> Vgl. BdK, Bd. 1, S. 1138 f. (Anm. 245).

<sup>51</sup> Vgl. Schmidt, Walter, Wilhelm Wolff, Kampfgefährte und Freund von Marx und Engels. 1846-1864, Berlin 1979, S. 223-232.

<sup>52</sup> Vgl. Obermann, Karl, Karl D'Ester, Arzt und Revolutionär. Seine Tätigkeit in den Jahren 1842 bis 1849, in: Aus der Frühgeschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Berlin 1964, S. 102-200.

<sup>53</sup> Adresse des Kommunistischen Korrespondenzkomitees in Brüssel an Feargus O'Connor in London, 17. 7. 1846, in: BdK, Bd. 1, S. 375.

//305/ 議会では反動的ないしはよくても小ブルジョア的な支配的多数派に直面して、いずれにせよ何事も達成しえないとか、そうでなければ、議会では労働者の諸問題は審議されないとか、だから議会はなんの利益もないとかいう類のなんらかセクト的考え方は、同盟とはまったくかけ離れたものである。逆に、同盟は選挙を禁欲するようなあらゆる現われと鋭く戦った。それは、1849年1月にプロイセン国会選挙を準備するさなかのゴットシャルク派との闘争にもあった<sup>54</sup>し、その現れはマルクスの「フランスにおける階級闘争」にもあった。すなわち、「小ブルジョアジーとプロレタリアートは、カヴェニャックに反対投票するため、そして票の結集によって、憲法制定議会から [524] 最終的な決定権を奪いとるために、まとまってナポレオンに賛成投票した。それにもかかわらず、両階級の最も進歩的な部分は、それ独自の候補者を立てた……。ラスパイユへの投票——プロレタリアとその社会主義的代弁者はそれを声高に表明した——は、まったくの示威行動にすぎなかった。それは、まさにどの大統領制度にも反対する、すなわち、憲法そのものに反対する非常に大きな抗議でもあり、それは、まさにルドリュ・ロランに反対するきわめて多数の投票でもあって、それによってプロレタリアートが独立した党として民主主義党から分離した最初の行動であった」<sup>55</sup>。

同じ時期に、まったく同じ意味で、「三月の呼びかけ」はこう断言した。すなわち、「プロレタリア党がそのような独立した行動によって果たすに違いない前進は、その代表者に二三の

反動家がいることで生み出されるかもしれない不利益よりも限りなく重要である」<sup>56</sup>。

われわれの考えでは、ここに、とりわけベベル、リーブクネヒト、ブラッケおよびジンガーが発展させたような19世紀の最後の三分の一期における革命的社会民主主義の議会戦術の本質的な根が横たわっている。しかしながら、リーブクネヒトが60～70年代に共産主義者同盟の諸経験を具体的にどれほど引き出したのかを、これまでよりももっと詳細に究明することはおそらくやりがいのあることであろう。

すでに強調されたのは、マルクスの党把握の基本的構成要素の一つが運動の全経過への見通しにあったこと、共産主義者たちは「プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの闘争が通過する種々の発展段階において、常に運動全体の利害を代表する」こと、そして、彼らがそうすることが可能なのは、彼らが「理論的に、プロレタリアートのその他の大衆よりも、プロレタリア運動の諸条件、経過および一般的帰結についての見通しを」より多くもっているからであること、である。

しかし、ここには、原理的に承認されずとも必要だと感じられる闘争の目標、すなわち共産主義社会秩序という目標とその日の諸課題とのあいだの不断の強い対立関係 (Spannungsverhältnis) が含意されている。われわれが、今日——ともかくも共産主義者同盟の後、130年以上//306/を経て——はつきりと理解しなければならないのは、この対立は当時あっては、その当時の共産主義者たちの誰一人として実際に要したほどの長い期間を予想していなかったという事実

<sup>54</sup> Vgl. Becker, Gerhard, Karl Marx und Friedrich Engels in Köln 1848–1849, Berlin 1963, S. 181–197.

<sup>55</sup> MEGA<sup>2</sup>, I/10, S. 150.

<sup>56</sup> Ebenda, S. 261.

を考慮に入れてさえも、今日よりもはるかに大きかったに違いないということである。それどころか、闘いがなされたのは、資本主義の転覆のためということは一度もなく、資本主義の完全な貫徹のために、封建制の残りものに対する資本主義の勝利のためになのである。マルクスおよびエンゲルスは、共産主義者たちは「将来の反対党」<sup>57</sup>であると、何度も強調した。

これは1848年頃のドイツには十分に妥当したのであるが、しかし60年代以来ますます変化し、そしてドイツ帝国はまだ強力な封建的残存物を持ち、ブルジョアジーの公然たる政治的支配が存在しなかったとはいえ、マルクスおよびエンゲルスは革命的な社会民主主義をすでに70年代において「ドイツにおける唯一の本当の反対党」<sup>58</sup>と呼んだ。ある程度対比することが可能な位置を占めていたのは、イギリスにあってはすでに40年代のチャーティストであり、フランスにあっては1848年6月以降の労働者たちである<sup>59</sup>。

共産主義者同盟の時期には、それを目指して努力がなされている階級のない社会状態と、認識される未発展の当時の状態とのあいだのはるかな距離のために、非常にしばしば見通しが、そしてまた自制心もが必要とされた。ヴァイトリングのような優れた人物でさえもそれらを奮い起すことはなかった。というのは、彼はすでに

に1842年にもつぱら力づくで、盗みと売春とで、財貨共有制を手に入れようとしたからである。ヴィリッヒが1850年に「全ドイツの意志に反して」<sup>60</sup>、なんらかの軍事的反抗の仕方、ドイツにおいていきなりなんらか共産主義のようなものを達成することができると思じたさい、それはほとんど意味のない詭弁であったが、しかし、——1845年には正しい立場を徹底して主張していた——シャッパーのような同盟員もまたこのはるかな距離に突き当たって難破したのであった。われわれがただちに共産主義のために闘わないのであれば、われわれは寝てしまってもよいであろうと、彼はマルクスに対して、1850年9月15日に異議を申し立てた。当面、反動が支配しており、[525] なんら合法的な大衆的土台が存在しない状況のなかで、党はどのような基本的課題を解決しなければならないかという問題、この問題は、——間もなく新たな闘争が始まることをまだ期待することが前提となっていた——「三月の呼びかけ」および「六月の呼びかけ」のなかでは、答えられていなかった。//307/ケルンの中央指導部がこの問題を彼らの実践活動のなかで、マルクスの党把握の意味において完全に解決したということが、同盟史のこの段階に対してこれまでよりもはるかに多くの注意が払われている理由の一つなのである。闘争が長期化するという見通しは大変な困難

<sup>57</sup> MEW, Bd. 8, S. 461.

<sup>58</sup> Ebenda, Bd. 19, S. 159.

<sup>59</sup> マルクスによれば、1848年6月以降は「プロレタリアートがブルジョアジーによって打ち破られ、現存政府への攻撃がブルジョアジーへの攻撃と直接に一致していた」(ebenda, Bd. 8, S. 458) 状況が発生した。このような初期の時点で勝利した革命は、しかしながら、「プロレタリアのみではなくて、彼らとともに農民および小ブルジョアを権力に」就けるであろう。そして、フランスにおいては、客観的な理由から、プロレタリア的措置ではなくて、農民的小ブルジョアの措置が採られるであろう (ebenda, S. 600)。1851年12月2日のクーデターはこの状況を変え、20年後にようやくフランスのプロレタリアートは再びブルジョアジーに対する直接の野党として現れた。

<sup>60</sup> MEGA<sup>2</sup>, III/3, S. 739.

のもとでのみ身につけられ得るものであったにしても、確認されるべきは、その見通しを同盟が原則的にはわが物としてしまっていたということであって、同盟を大きな歴史的な意味での党の特別に進歩的な現象形態の一つとして評価するさらなる理由なのである。それについてエンゲルスは1852年末にこう書いた。すなわち、共産主義者同盟は、まずは断固たる将来の闘争を準備したのであって、この「根本的な課題はその構成員の大多数によって十分に理解されていたので、若干の功名心の強い出世主義者たち——ヴィリヒ/シャッパー派の指導者たちを遠回しに言っている——「は、彼らが革命を即座に行なうために同盟を陰謀家の結社に変えようとしたときに、ただちに放り出されたのであった」<sup>61</sup>。

この問題では、「左翼的」偏向と並んで、右翼的偏向もまた存在した——カール・ヴァラウ(1848年以来)、ヨハンネス・ミーケル(萌芽的にはすでに1850年以来)およびハインリヒ・ピュルガス(彼の拘留期以後)のような一時は非常に活動的な同盟員たちによって代表される——。個々のニュアンスを別にすれば、彼らは次のような見解を主張した。すなわち、資本主義がまず完全に貫かれなければならないので、人が最も革命的に活動するのは、この基本傾向を支えることによってである。つまり、活動的なブルジョア・自由主義的政治家として登場することによってであり、独立したプロレタリア

党の「時機尚早の」形成によって、統一された反封建の戦線を爆破し害することによってではないのである、と。

エーヴェルベックはすでに1841年にパリで、そしてシャッパーは1845年にロンドンでヴァイトリングとの討論のなかで、彼らの世代は共産主義を決して体験しないであろうこと、将来の世代のための基盤を準備することがまず大事であると強調していたとはいえ、後にマルクス主義によって学術的に基礎づけられた世界観の構成部分となったこのような理解が勝利をおさめるのがあまりにも困難であったのは納得のいくところである。そしてこれは革命運動の今日までの全歴史を通じて、現実的な問題であり続けている。はっきりしているのは、共産主義者なら誰でも、労働者階級の歴史的使命が実現するための道のりを彼自身の貢献によってできるだけ遠くまで踏破されるのに役立つ、そうすることによって自らもまた体験するための積極的な努力をしているということである。他方、修正主義の本質に属するのは、//308/目標によってなにかをはじめることなど決してできないということである。[526] ベルンシュタインの説明の最も普及した言い方として「運動がすべてであり、目標は無である」という命題が通用しているのも故ないことではない。

ベルンシュタインが、修正主義者として現れる20年も前に(1879年の悪名高い三つ星論文のなかで)この把握の萌芽を主張していたときに、

<sup>61</sup> MEW, Bd. 8, S. 400. — マルクスはこれと完全に一致していた。Ebenda, S. 461. — まったく類似の表現をヨーゼフ・ワイデマイアーはその論説「秘密諸結社と共産党裁判」(Turn-Zeitung [New York], 15. 1. 1853)において用いた。その論説において彼はさらにこう述べる。すなわち、「共産主義者同盟は歴史に前例を持たない。というのは、従来知られている秘密結社のすべてにはある行動を直接準備するという目的があったが…… — 共産主義者同盟の行動はずっと遠くに定められており、その行動は革命後およびその最中によやく始まるのであって、一時的な目的としては革命において勝利した諸党派に対する闘争のための労働者党の武装以外の何物でもないからである。」

マルクスおよびエンゲルスは、「回状」等において、「われわれはこうしたたわ言すべてを1848年このかた大変よく知っている」<sup>62</sup>と指摘して、ベルンシュタイン、ヘibelルクおよびシュラムに反対した。党は、マルクスおよびエンゲルスの理解においては、その綱領を「子どもや孫のための相続物」とみなすのではなくて、「自分自身のための」、彼ら自身の生涯のためのものとみなした<sup>63</sup>のであり、したがってまた、党の政策を、「資本主義秩序の転覆が達成したい彼方に」あり、「現代の政治的实践にまったく意義がない」<sup>64</sup>かのようにしようとすることは、党に対する裏切りなのである。マルクスおよびエンゲルスの党把握において、共産主義的目標を目指すことは、まずもって時々定められる問題ではなくて、根本的な問題なのである。共産主義者および革命家であるということは、マルクスおよびエンゲルス以来、もはや翌日に「戦闘開始する」準備ができていないことを意味するのではなくて、その全活動——何十年にもわたる——を、歴史的に現れる、労働者階級の支配を樹立するようないかなる客観的可能性をも捉えて、勝利をおさめるのに利用することができるよう整えることを意味するのである。しかしながら、これが可能なのは、できるだけ広範な労働者大衆が、独立した党のなかで、またそのような党によって、革命的な意味で長期にわたって教育され、革命闘争のなかで鍛えられるという条件の下でのみなのであるが、これはまたこれで、日常闘争すべてが革命的精神の

なかで進められ、妥協的・改革的精神のなかで進められるのではないということを前提するのである。

前世紀の40年代において、課題は、形成される党に次のことを自覚させるところにあった。すなわち、ドイツはブルジョア革命の前夜にあるということ、この歴史段階——全社会秩序——は跳び越えることができないということ、まず封建制の残りがすべてが取り除かれ、本来の闘争の地盤が掃き清められなければならないということである。しかしながら、この長い歴史過程のなかで労働者階級は、そしてとりわけその党は（例えば「真正」社会主義者たちが求めたように<sup>65</sup>）受動的な傍観者であることは許されず、永続的となり、さらに——諸中間段階を経ながら——プロレタリア革命へと移行し得る動学を備えているところのブルジョア・民主主義革命を促進し貫徹するための最高度に活動的な闘士なのである。この把握の最も重要な帰結であるのは、//309/はじめから、すなわち、まだ封建的諸関係の下でも、大ブルジョアジーさえもが客観的にはある程度までなお革命的な階級であるという諸関係の下で、独立したプロレタリア党が、労働者階級を組織的、政治的およびイデオロギー的にブルジョアジーの影響から分離するための最も重要な梃子として、建設されねばならないということである。

ベルンシュタインが1899年に、マルクスおよびエンゲルスが着想を与えた1850年の共産主義者同盟の政策を、ブランキ主義と呼んだことは、

<sup>62</sup> MEW, Bd. 19, S. 163. — 以降の諸ページにおいてマルクスおよびエンゲルスは「チューリッヒの3人の検閲官」の把握を『共産党宣言』において批判された「ドイツ的ないしは『真正』社会主義」と比較した。

<sup>63</sup> Ebenda, S. 162.

<sup>64</sup> Ebenda, S. 163.

<sup>65</sup> Vgl. Förder, Marx und Engels am Vorabend der Revolution, S. 142–176.

最も小さく見ても途方もない誤解であった。というのも、そのなかでまさしくブランキ主義の克服が宣言されていたからである。すでに1845年のフォイエルバッハ・テーゼのなかで基礎が据えられた、行動における自己変革という理論によって、労働運動は、客観的に非革命的な状況のなかで、直接的な行動のためにごくわずかの少数者が秘密に陰謀をめぐらすという梃子の他には革命的活動の梃子が見出せなかったジレンマから解放された<sup>66</sup>。

マルクスおよびエンゲルスによる革命把握および党把握は、労働者階級およびその他のすべての勤労者の大衆を考慮に入れていた。労働者階級の意識は政治的实践において変化するのであって、そのようにして労働者階級は歴史的に行動する力となるのである。「共産主義的意識……を大規模に生み出す」<sup>67</sup> この過程を指導することが、共産主義者たちの使命である。

共産主義者同盟は、この過程においてその指導的役割が果たせるよう、[527] 理論的訓練に高い優先権を認め、その構成員の学術的発達を最大限に促進しなければならなかった。「ブルジョアジーが彼らの支配とともに導入せざるをえない社会的および政治的諸条件を、ドイツの労働者たちがただちに、ブルジョアジーに対する武器とまさに同様のものとして向けるためには、労働者たちのあいだで、ブルジョアジーとプロレタリアートとの敵対的対立についてのできるだけはっきりした意識をつくり出すこと」<sup>68</sup> が同盟の基本的な使命であったとするならば、

同盟員たちのところでは、彼らがイデオロギー闘争に曇りなく介入することができるためには、もっと高度な学術的理解が必要とされねばならなかった。この時期以来、教育活動、サークル活動、理論的討議が、革命的プロレタリア党であるならば、決して手放すことのできない特徴となっている。

この問題において、党理論および革命論は相互に特に明白な形で関係している。「共産主義的な社会の展望を現実化するためのプロレタリア的・革命的理論と実践的闘争との統一という基本的な考え方でみれば、党についての教えはマルクスの革命把握の魂である」<sup>69</sup>。

ここでは当然にも、同様に関連しているのが、社会主義および共産主義にかんするマルクスおよびエンゲルスの把握、すなわち、達成されるべき目標にかんする彼らの見方の、同時に平行して行われたその後の発展である。//310/別様に表現すればこうである。すなわち、労働者階級がブルジョア・民主主義革命に積極的かつ独立に参加するという理論によって、先に示唆した対立関係を克服する実践的可能性がその第一歩をしるした間に、同時に、マルクスおよびエンゲルスはもう一方の対立の極についての見方を発展させた。これこそが必然的な弁証法なのである。

共産主義的な党把握の本質的諸特徴に属するのは、学術的に承認される目標のため何世代にもわたる闘争が行なわれなければならない、その目標は、単なる意志や奇襲で達成することがで

<sup>66</sup> Vgl. Hundt, Martin, Wie das „Manifest“ entstand, Berlin 1973, S. 63 f. [拙訳『共産党宣言』はいかに成立したか』（八朔社、2002年）、95ページ以下。]

<sup>67</sup> MEW, Bd. 3, S. 70.

<sup>68</sup> Ebenda, Bd. 4, S. 492f.

<sup>69</sup> Kossok, Manfred, Karl Marx und die Grundlegung wissenschaftlicher Revolutionsauffassung, in: ZfG, 28, 1980, 2, S. 115.

きるのではなくて、その時々時代の内容にかんする学修および見通しを求めるといふことである。しかしながら、これはまた、次のことを意味している。すなわち、労働運動にかんする歴史記述は、大きな本質的な力だといふことであつて、その力によつて共産主義者同盟以来の自らの歴史の認識とその自らの歴史の諸事件とが仲介されるのであり、その力によつて闘士たちの諸世代が相互に固く結びつけられるのだといふことである。いずれ迫り来る闘争が長期にわたるのを知ることは、共産主義者たちに疑念

ないしは受動性を引き起こすことには決してならない。といふのは、彼らはあらゆる状況の下で、「万国の労働者党の最も断固たる、常に先へと駆り立てる部分」<sup>70</sup>であるからである。

マルクスおよびエンゲルスによる党把握に欠くことのできない一部分なのは、共産主義者たちは歴史過程を積極的に実践する者たちであるといふことであり、彼らは結局のところ、新たな社会を孕む旧い社会の陣痛を促進し短縮するのに助力しているといふことである<sup>71</sup>。

付記

本稿は2011年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究課題名「『共産党宣言』の起草者名の普及史」(課題番号21530182)の研究成果の一部である。

<sup>70</sup> MEW, Bd. 4, S. 474.

<sup>71</sup> Vgl. ebenda, Bd. 23, S. 16; ebenda, Bd. 8, S. 414.